



**発行**  
 2011年8月1日 第86号  
 社会福祉法人 名古屋キリスト教社会館  
 発行人/池田魏義  
 編集人/湧井規子  
 〒457-0805  
 名古屋市南区三吉町6丁目17番地  
 TEL/052-612-3370 (本部)  
 FAX/052-611-9085  
 URL/http://shakaikan.com  
 E-mail/shakaikan@shakaikan.com

「1つの部分が苦しめばすべての部分がともに苦しみ、  
 1つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」  
 (コリントの信徒への手紙 12章26節)

**地域で暮らす**

「障がいの重い仲間たちが親元を離れて地域で自立して暮らす」ことを目的にホームづくりが始まり、早10年経ちました。今年の3月には57名のホームがスタートし22名の仲間が各ホームで暮らしています。「地域で暮らすことの大切さ」を仲間たちと暮らしを共にしサポートする側の私達が仲間の姿を通して学んできたように思います。

**地域の一斉清掃活動  
 クリーンキャンペーンに参加**

クリーンキャンペーンのことを回覧版で回ってきた時、正直言つてどう参加してよいかわかりませんでした。障がいをもつ仲間たちが「クリーンキャンペーンを理解できないのに何が出来るのだろう」ということだったと思います。若いホームスタッフとも話し合い、とにかく「地域で暮らす一員として何が出来るかわからないけれど、仲間一人ひとりができることを考えて参加してみよう」と、今年で2回目の参加となります。一度目の時にはホームに駆け込もうとしていた仲間が、ゴミ袋をもってスタッフの後をついてきた姿に驚きました。地域の役員さんに「ご苦労さん」と声をかけられると、ほうきを握るのが精いっぱいなのにギュッと握りしめる仲間、地域の方の掃除の姿をみて自分もやってみようという動きがそうとする仲間等、ホームでの普段の生活ではみられない姿に出会いました。どの仲間も自分の出せる力を一杯発揮し、周りの期待を感じて応えようとする姿に、ホームスタッフは励まされました。それと同時に、「できるだけできない」ではなく、一生懸命な仲間の姿に共感し声をかけて下さる地域の方々に、地域の一員として参加することの大切さを学びました。

**花子さんの姿**

花子さんがこの地域に住むようになったのは2003年です。それまで

40数年「施設」で暮らしていました。「自分の部屋がある家で暮らしたい」「行きたい時に買い物に行きたい」という希望で現在のホームに引っ越し、54歳で新しい生活を始めました。知的障がいと軽い下肢麻痺がありますが、持ち前の明るさと快活さで地域の踊りの教室に通い地域の行事にも参加し、友達もできました。旅行にも出かけ好きな花を見に行き、もともと自分が見たい生活をしていこうとしていた矢先、2007年に脳内出血で倒れました。その後他の疾病を併発し手術。一時はほとんど周りのことを感じることもできないような状態になりました。手術のいかいあつて左麻痺が後遺症として残ったものの少しずつ周りのことを理解でき、言葉で伝えることも出来るようになりました。しかし、動けない自分の状態がわるようになってくるにつれ、何故こうなったのか理解できない彼女は、不安や怒りをいっばいかえるようになりました。そんな彼女が「自分のまだ残っている力で生きていこう」と意欲を取り戻したのは、「花子さん」と出会ってとても勉強になる」といって心配し励ましてくれた友人、知人の存在によると思います。老化と後遺症による衰えは現在も進行し日々戦っている状態で、花子さんの人生にとっては、ここで暮らしたのはわずかな期間かもしれませんが、頼る家族や身寄りもない花子さん。けれど、花子さんの歩みから、「自分を理解し共に泣いて、笑って、親身になってくれる人がいる」。それが自分への信頼につながり、生きる力になっていっているように思いました。

仲間たちの暮らしの中で、私達が、日頃「あたりまえ」と思っていることが実はとても大切なものが詰まっているのだということに気づかされます。身近に住んでいる人たちに出会い、お互いに理解をしい、暮らしの中で信頼と連帯を築いていく、その営みの中に人と生きていく力があるということ。地域で暮らすことを大切に思い、かみしめています。

障害者支援センター長  
 湯浅 登

**事業所紹介**

**障害児者  
 福祉事業部門**

- 南部地域療育センターそよ風
- 愛育診療所
- デイサービスみどり
- デイサービスACT
- 南区障害者  
 地域生活支援センター
- 発達センターあつた
- デイサービスあつた
- 発達センターちよだ
- デイサービスちよだ
- ホーム社会館  
 のどか・うらら・天歩・  
 しゃかいかん・いっほ
- ヘルパーステーションぴぽっと
- 活動センターねーぶる

**ミニミニ  
 デイ  
 ケア部門**

- 菜の花保育園  
 (子育てセンターなのはな)
- 名南ユースセンターACT
- ちどり児童会
- デイサービス友
- デイサービス愛
- 居宅介護支援事業所
- 配食サービスゆうの里

**名古屋キリスト教社会館の使命**

名古屋キリスト教社会館は、創立の精神に基づき、次の使命を担います。

1. すべての人々がかけがえのない存在として人権が保障され、自立した人間として成長していける社会を築くことをめざします。
2. 隣人とのあい、ふれあい、そだちあいを大切に、ともに地域の課題を担うことを通して福祉の輪が広がるように努めます。
3. 世界の人々との交わりを通して、福祉社会の実現のために働きます。



東日本を襲った大津波の様相をテレビで見ながら、「もし自分、あの津波で流されていく一人であつたら」と考えました。まずは、必死で、その流れに呑み込まれないように、「藁をも掴もう」とし、「助けて」と叫んでもあろう、と思いません。が、そのすべては空しく、結局は、水の中に吸い込まれていく時には、「もう、これで終わりだ」と考えるゆとりもなく、死の世界へと飲み込まれていくことだろうと思いました。

この喪失を補い、また回復するために、多方面からの救援の働きが進められていることは、有効であり、意義あることだと思います。名古屋キリスト教社会館の創設もこういう働きに由来していますが、ただし物量では満た

### 大津波で思ったこと

されない「空しさ」ともいうべきものがあります。そのために「心のケア」をするボランティアの働きがなされていることも、事態に応じた適切な配慮と

ところで、わたくしは、あの震災の事を知ったとき、キリストが「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(マルコ福音書十三章三十一節)と言われた言葉を思い起こしました。「天地」とは、自分が生きていく世界のことです。この世界は「天変地異」によつて、今までとは全く違ったものに変えられます。ただし、それは、地震のような自然現象によるだけのもの

ではありません。今回の原発問題によつて示されていることは、人間の飽くことのない利便や利益追求によつて、既往の世界は滅ぼされてしまう、ということであり、原子力や大気が、人間によつて、人間自身が生きられないように天地を異変させてしまうのです。「人間よ、おごるなかれ」という警告が

る天地の異変への警告であつたと同時に、人間が自己肯定的である限り、既往天地は必ず崩壊することの予告であつた、と思ふのです。旧約聖書の中の「哀歌」の作者は「塵に口をつけよ、望みが見出されるかもしれない」と歌っています(三章二十九節)。絶望状況にある人が大地に口をつけて、黙すしかなく、何も見えず、絶望以外にない状況の中で、「望みが見出されるかもしれない」と、この作者が言い得たのは、「わたしの言葉は滅びない」と言われる方が、各自における天変地異の中でも、拠るべき方として現存しておられることを信じていたからであつた、と思ふます。それはまた「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心に掛けていてくださるからです」という聖書のメッセージでもあります(ペトロの手紙一・五章七節)。

わたしが、津波に呑み込まれて失われて行く自分を想定しながら、「それでは困るなあ」という思いから、「それでもいいのだ」という思いへと導かれたのは、如上の聖書の言葉を想起したからでした。

貸借対照表 2011.3.31 単位：千円

貸借対照表 2011.3.31 単位：千円. Table with columns for assets (流動資産, 固定資産) and liabilities (流動負債, 固定負債).

### 2010年度事業活動収支決算書

2010年度事業活動収支決算書. Large table with columns for various departments (e.g., 介護保険収入, 施設整備費) and rows for income and expenses.

### 差引純資産 1,366,327,146円

二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災による大津波と福島原発事故は日本に未曾有の事態をもたらしました。死者行方不明者は20,600人を超え、命が助かった人も身近な人を見失った悲しみに加え生活基盤を失った苦悩・不安が覆いかぶさっています。

### 二〇一〇年度 決算及び事業報告

この事態に対して、日本全国・世界から沸き起こっている支援活動には目を見張るものがあります。改めて、社会生活においてなくてはならない物は何かを問いかけています。そして、創立五〇周年を迎えた名古屋キリスト教社会館は、伊勢湾台風の大災害と救援活動の有様をリアルに想起させられていきます。五月の報道によると陸前高田の長洞地区の住民の方が「みんなが集まって話ができるセンター」の役割を持つ場がほしい」と述べていましたが、五十年前の当法人の設立時の地域の方と現在の震災を受け生きている人たちの言葉が同じであったことに驚くとともに、「福祉の原点」を見る思いです。福祉をめぐる情勢は、東日本震災により増々深刻になっていきます。財政課題を分析しつつ国民の生存権をしっかりと保障する施策展開とセーフティネットの機能を果たすべく公民協働の社会福祉事業を展開することが求められています。